

国内の畜産物の需給動向

牛肉

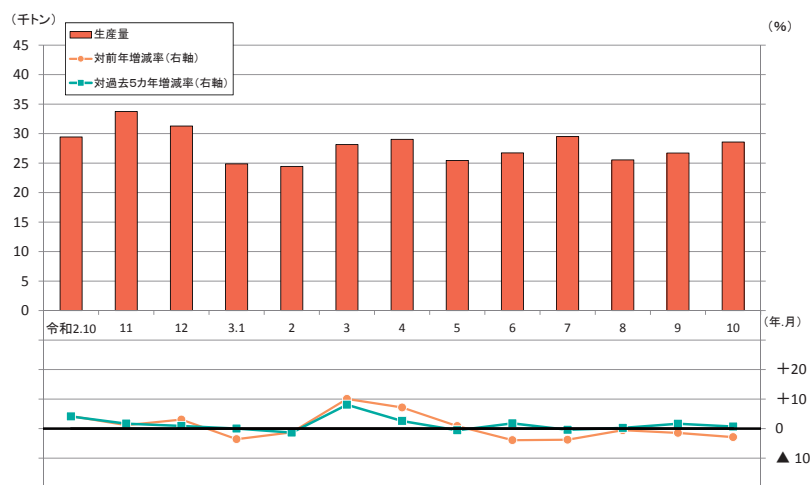
3年10月の牛肉生産量、前年同月比2.9%減

1 令和3年10月の牛肉生産量は、2万8581トン（前年同月比2.9%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万3431トン（同5.3%減）、乳用種は7490トン（同3.5%減）と、ともに前年同月をやや下

回った。一方で、交雑種は7199トン（同2.8%増）と前年同月をわずかに上回った。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、0.7%増とわずかに上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



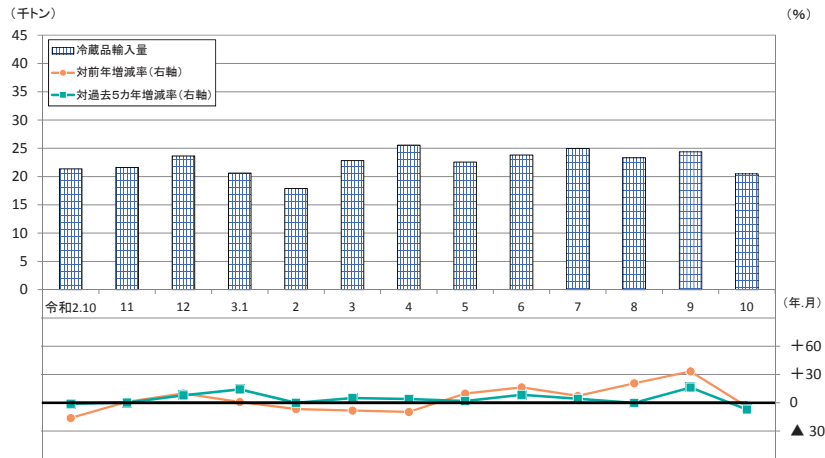
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 10月の輸入量は、冷蔵品は、米国産などの輸入量が増加したものの、豪州産の輸入量が現地価格の高騰などにより減少したことから、2万488トン（同4.1%減）と前年同月をやや下回った（図2）。冷凍品は、米国産の輸入量が現地価格の高騰などにより減少したものの、他国産の輸入量が増加したことから、3万4659トン（同

17.2%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体では5万5203トン（同8.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

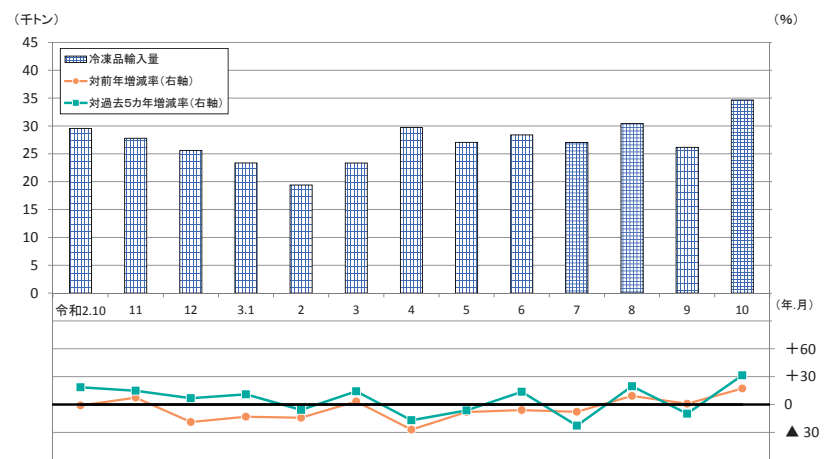
なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は7.1%減とかなりの程度下回った一方、冷凍品は31.5%増と大幅に上回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 10月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は172グラム（同12.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較では、4.7%減とやや下回る結果となった。

また、外食産業全体の売上高（同0.5%減）は、全国的に緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置が解除されるとともに、首都圏や大阪府で営業時間の短縮要請も解

除されたが、酒類提供が再開されても居酒屋などでは依然として厳しい状況が続いたことから、前年同月をわずかに下回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフード洋風は、テイクアウト、デリバリー需要が引き続き好調だったことから、同11.8%増と前年同月をかなり大きく上回った。一方、牛丼店を含むファーストフード和風は、営業時

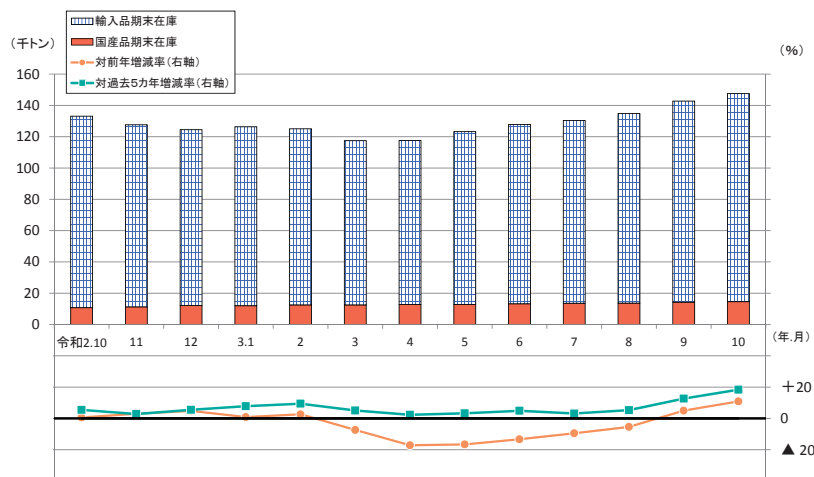
間の短縮および店舗数の減少などにより、同1.9%減と前年同月をわずかに下回った。また、焼き肉は、営業時間の短縮などにより、同3.3%減と前年同月をやや下回った。

4 10月の推定期末在庫は、14万7567トン（同10.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。このうち、輸入品は13万2959トン（同

8.7%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

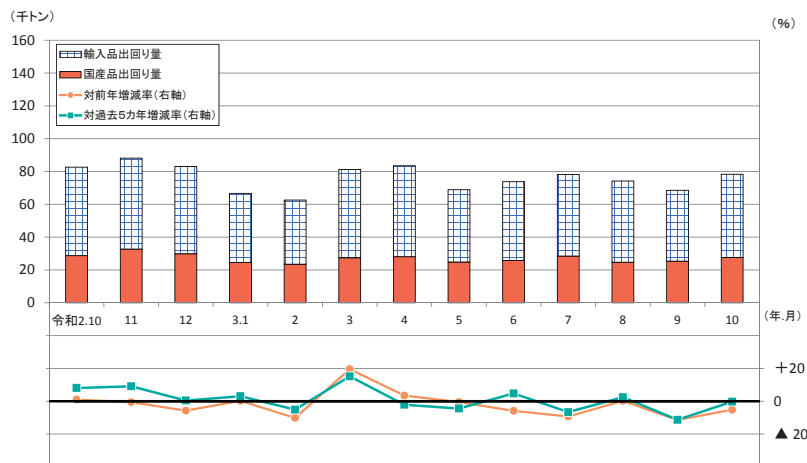
推定出回り量は、7万8341トン（同5.2%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は2万7617トン（同4.0%減）、輸入品は5万723トン（同5.9%減）と、ともに前年同月をやや下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 今岡 峻人)

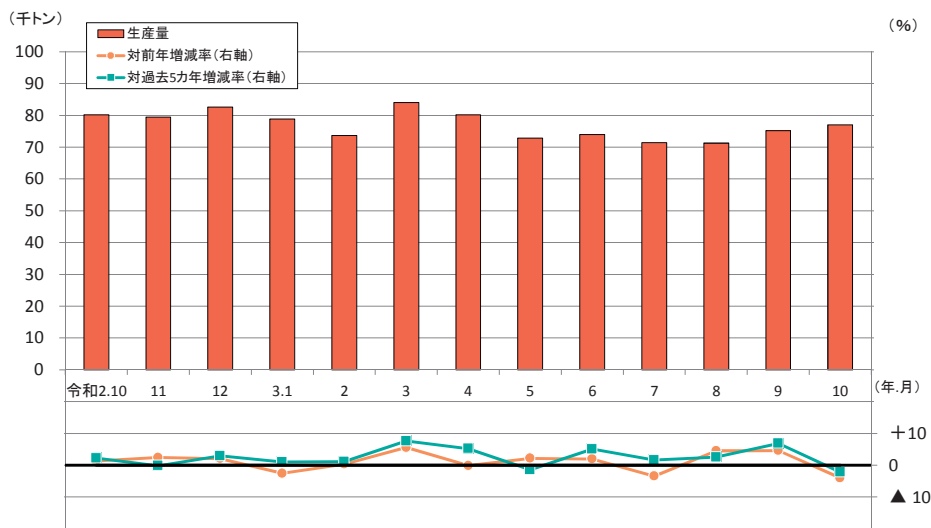
豚 肉

3年10月の豚肉生産量、前年同月比4.0%減

1 令和3年10月の豚肉生産量は、7万6972トン（前年同月比4.0%減）と前年同月をやや下回った（図1）。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、2.1%減とわずかに下回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



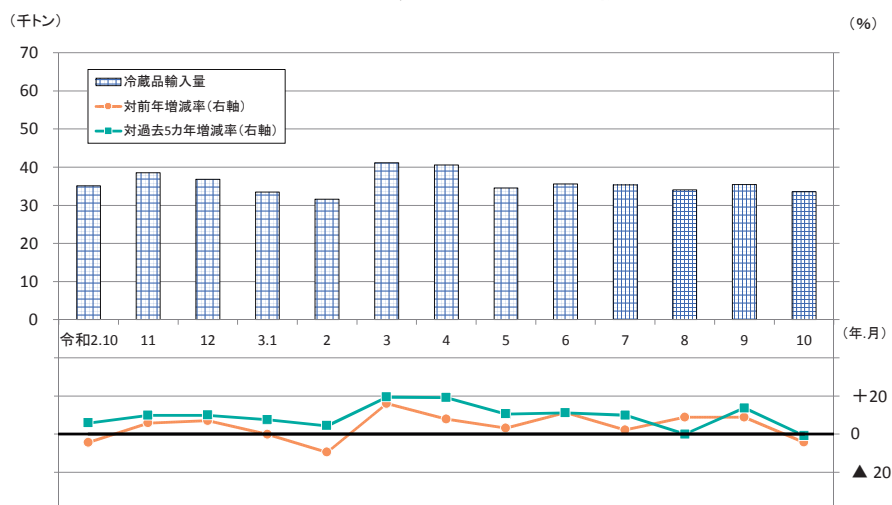
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 10月の輸入量は、冷蔵品は、北米における現地価格の高止まりの影響などから、3万3529トン（同4.4%減）と前年同月をやや下回った（図2）。冷凍品は、国内在庫が高い水準であったことなどにより前年の輸入量が少なかったことに加え、中国の買い付けが弱まったことにより相場が下がった欧州産の輸入量が増えていることなどから、4万4348トン（同18.7%

増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体では7万7876トン（同7.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

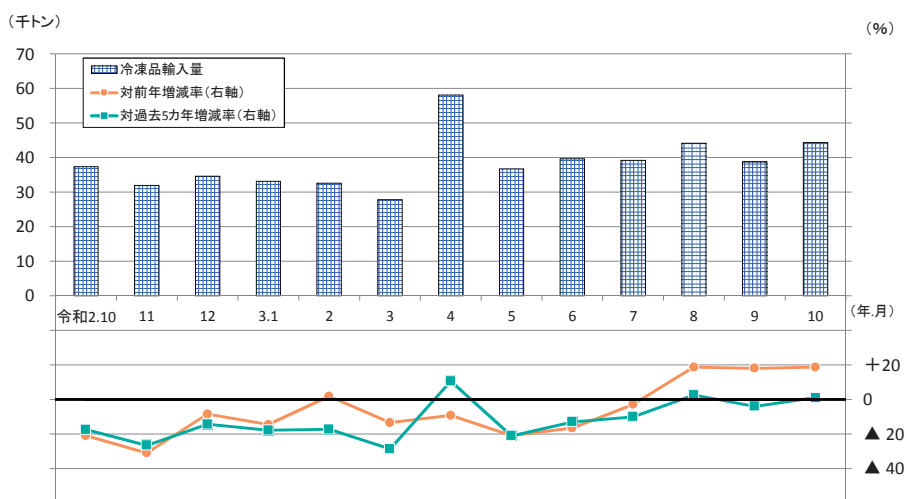
なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は0.9%減とわずかに下回った一方、冷凍品は1.1%増とわずかに上回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 10月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、667グラム（同2.4%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

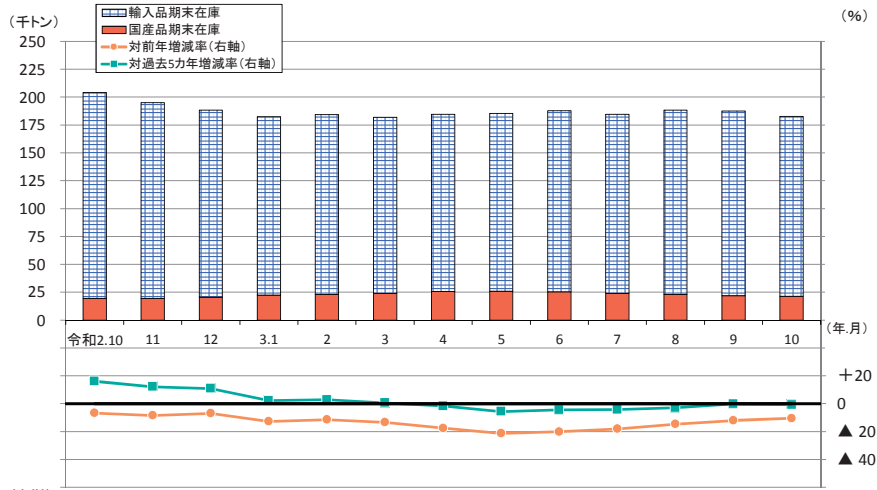
なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較では、7.7%増とかなりの程度上回る結果となった。

4 10月の推定期末在庫は、18万2807トン（同10.5%減）と前年同月をかなりの程度下回った。このうち、輸

入品は、16万1448トン（同12.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図4）。

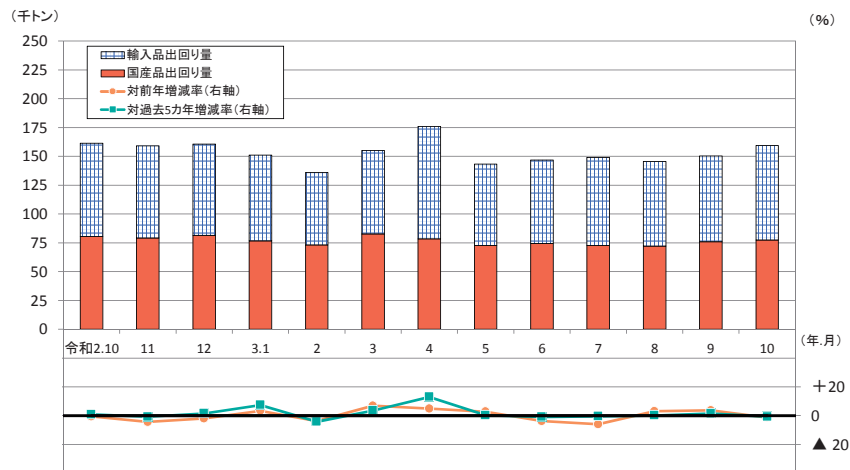
推定出回り量は15万9236トン（同1.3%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は7万7317トン（同3.8%減）と前年同月をやや下回った一方、輸入品は8万1919トン（同1.2%増）と前年同月をわずかに上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

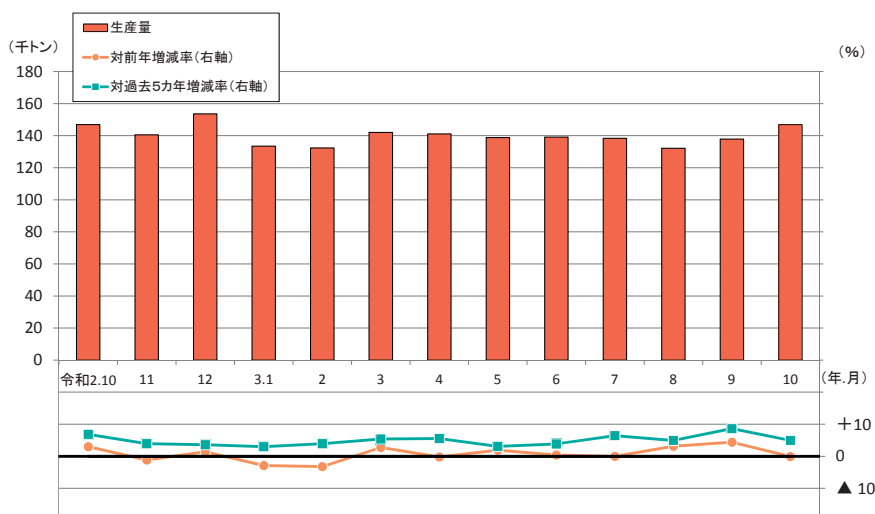
鶏肉

3年10月の鶏肉生産量、前年同月比0.1%減

1 令和3年10月の鶏肉生産量は、14万6818トン（前年同月比0.1%減）と前年同月並みとなった（図1）。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、好調な需要を背景に、4.9%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：骨付き肉ベース。

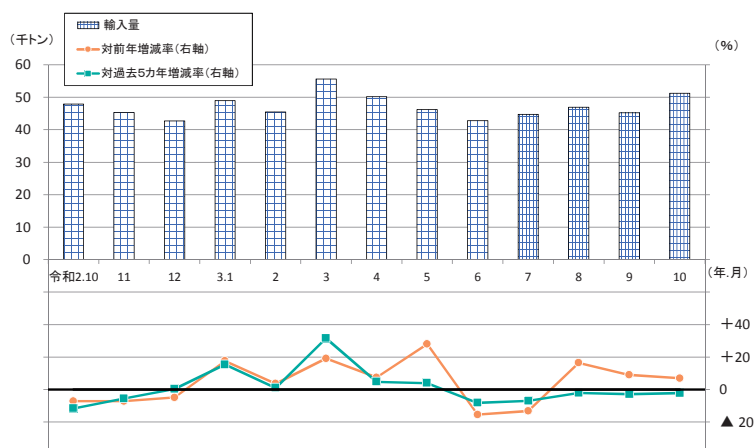
注2：成鶏肉を含む。

2 10月の輸入量は、タイにおける新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によりタイ産の輸入量が減少した一方、ブラジル産および米国産の輸入量が増加したことから、5万1212トン（同

6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。

なお、過去5カ年の10月の平均輸入量との比較では、2.2%減とわずかに下回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

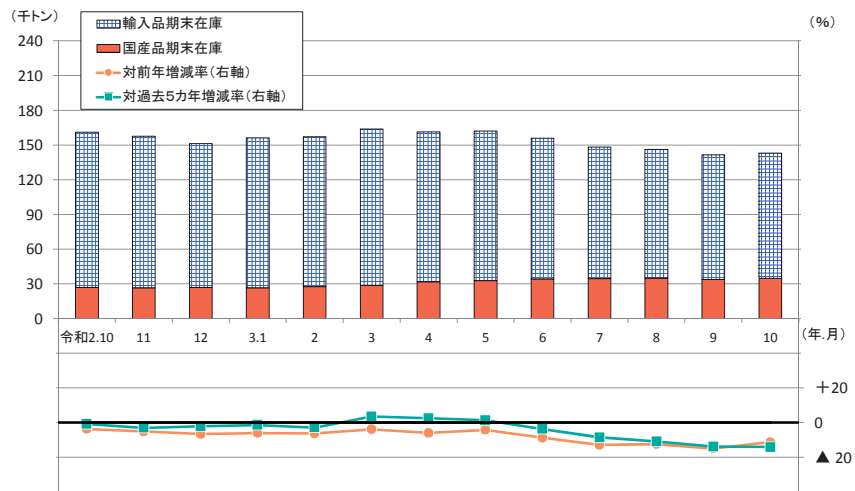
3 10月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、532グラム（同1.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較では、7.1%増とかなりの程度上回る結果となった。

4 10月の推定期末在庫は、14万2877トン（同11.2%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。このうち、輸入品は10万8208トン（同19.3%減）と前年同月を大幅に下回った。

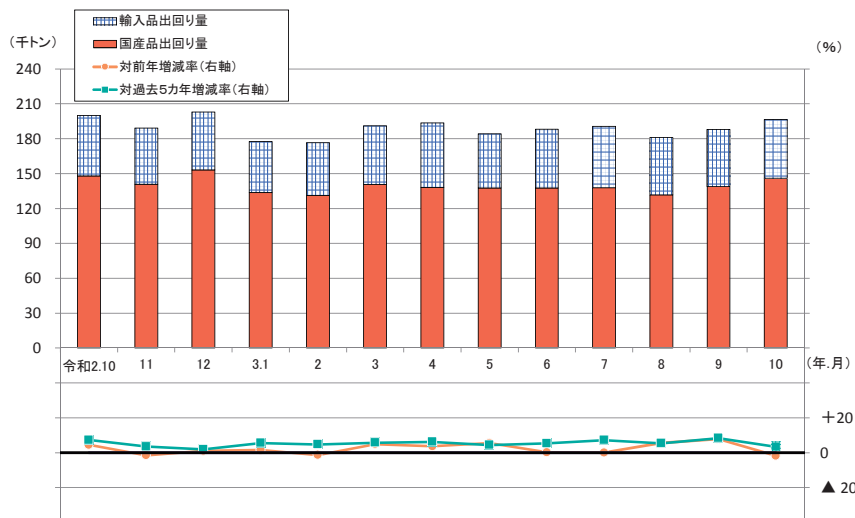
推定出回り量は、19万6510トン（同1.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図4）。このうち、国産品は14万5922トン（同1.3%減）とわずかに、輸入品は5万588トン（同3.1%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

牛乳・乳製品

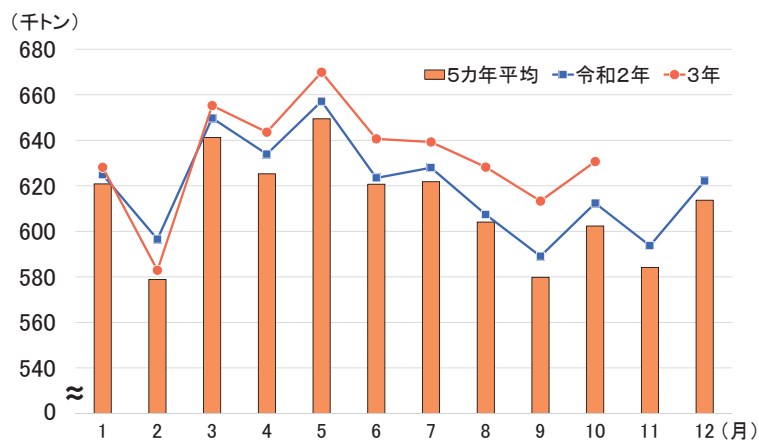
年末年始の処理不可能乳の発生回避に向けて酪農・乳業が連携して対応

令和3年10月の生乳生産量、前年同月比3.0%増

令和3年10月の全国の生乳生産量は、63万651トン（前年同月比3.0%増）と、前年を上回って推移している（図1）。地域別に見ると、北海道が35万8648ト

ン（同3.9%増）と前年同月をやや上回った（農林水産省「牛乳乳製品統計」）。都府県についても27万2003トン（同1.8%増）と増加傾向が継続している。東北地域が減少傾向で推移しているものの、関東、東山、東海、九州地域を中心に都府県全体での生産量が増加している。

図1 生乳生産量の推移



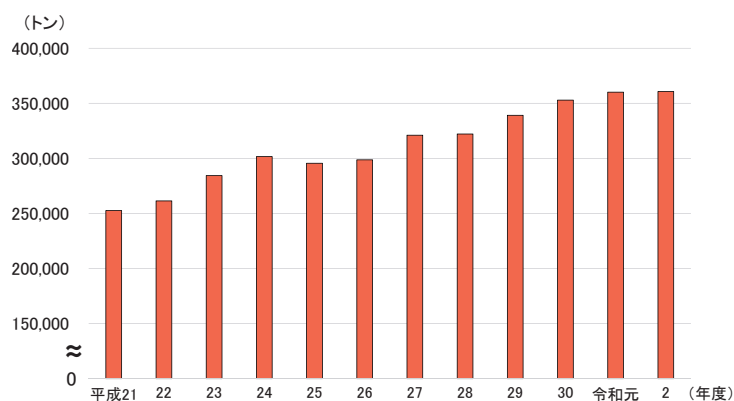
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

国産チーズの生産支援について

近年、食の洋風化や健康機能の評価により、チーズの消費量が増加傾向で推移している一方で、チーズの国産割合は減少傾向にある（図2、3）。プロセスチーズ原料用では平成

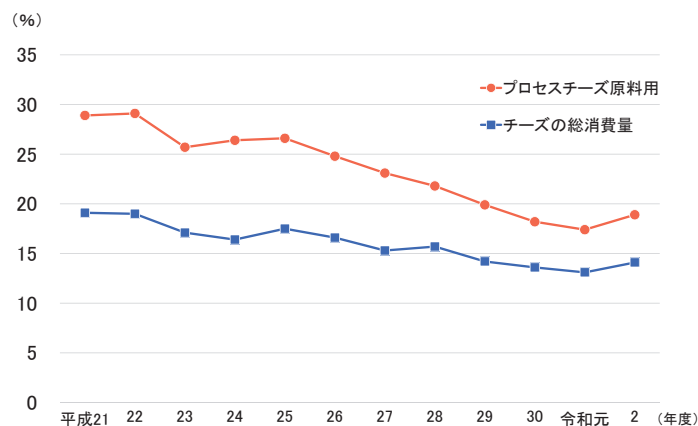
29年度から20%を、総消費量では同年度から15%を、それぞれ下回って推移しており、日EU経済連携協定発効直後の令和元年度の国産割合はプロセスチーズ原料用、総消費量のいずれにおいても過去最低となった。

図2 チーズの総消費量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」
注：令和2年度は速報値。

図3 チーズの国産割合



資料：農林水産省「チーズの需給表」
注：令和2年度は速報値。

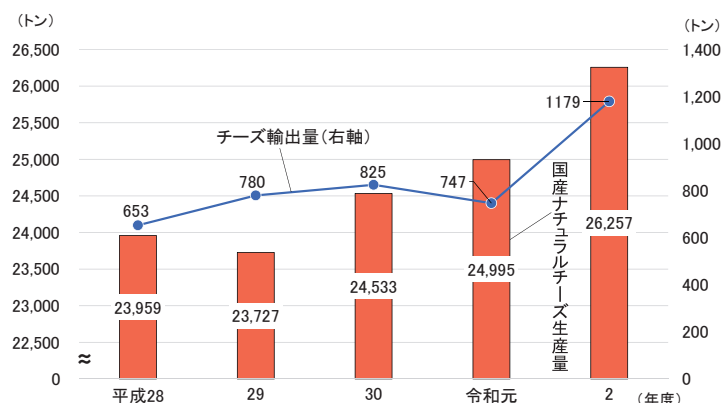
国産チーズのブランド化、生産・消費拡大に向けてさまざまな取り組みが行われている。その一つに国産ナチュラルチーズのコンテストの開催が挙げられる。オールジャパンナチュラルチーズコンテストは国産ナチュラルチーズの製造技術向上と消費拡大を目的に、一般社団法人中央酪農会議により平成9年度から隔年で開催されており、国内のチーズ生産者から出品された国産ナチュラルチーズを審査し、選出・表彰する。また、チーズプロフェッショナル協会が主催するジャパンチーズアワードは26年から隔年で開催されており、料理家やジャーナリスト、販売・流

通の従事者、チーズの生産者などに加え、海外からも審査員を招きさまざまな角度から審査を行っている。

当機構でも支援事業を行っており、国産チーズ生産奨励事業はチーズ向け生乳の品質向上を図る生産者を対象とし、乳質向上などに資する取り組みを実施した上で、要件となる乳質基準を満たした生乳に対して奨励金を交付している。

このような取り組みの結果、プロセスチーズ原料用を除いた国産ナチュラルチーズの生産量やチーズの輸出量は増加傾向で推移している（図4）。

図4 国産ナチュラルチーズ生産量（プロセス原料用を除く）およびチーズ輸出量の推移



資料：農林水産省「チーズの需給表」、財務省「貿易統計」
注：令和2年度の生産量は速報値。

年末年始の処理不可能乳の発生回避に向けて、生産抑制や消費促進などの取り組みを実施

一般社団法人Jミルクは10月26、27日、令和3年度の年末年始需給に係るオンライン説明会を開催した。COVID-19拡大に伴い、昨年のような巣ごもり需要が見られないなど牛乳などの飲用需要が低調に推移し、学乳停止などにより生乳需給が大幅に緩和する年末年始に処理不可能乳が発生する可能性が高まっていることに対し、(1)年末年始に生乳出荷量を一定程度抑制した酪農経営体に対して一定額を助成(2)業界内で

機動的状況にあることを共有し、メディア・SNSなどを通して不需要期の消費促進の二つの対策を打ち出した。

処理不可能乳の発生は生乳生産基盤の弱体化や食品廃棄と受け取られることによる業界イメージの低下につながり、酪農・乳業の発展に大きな障害となりうる。このため、酪農・乳業が連携して、生産抑制に取り組むとともに、12月中旬から新聞広告などにより消費者に対し年末年始の期間の飲用乳を始めとした乳製品の消費促進に対する協力を訴えている。

(酪農乳業部 古角 太進)

鶏 卵

11月の鶏卵卸売価格は前月を下回るも月内は上昇傾向で推移

令和3年11月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり207円（前年同月比36円高）と前年同月を上回った（図1）。鶏卵卸売価格の動向を見ると、本年は、昨冬の高病原性鳥インフルエンザの

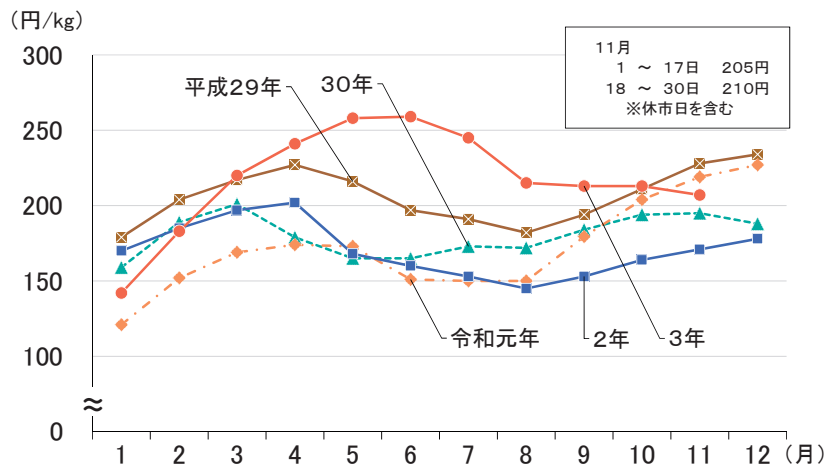
発生により採卵鶏の殺処分羽数が多かったことなどから、3月以降、9カ月連続で前年同月を上回って推移している。同価格は、気温の上昇に伴い低下し、夏場の低需要期に底を迎え、年末の需要期に向けて上昇する傾向が

あるが、本年は、例年とは異なる動向となっている。過去4カ年の11月の同価格を見る
 といずれの年も前月の価格を上回っているもの
 の、3年11月は前月を6円下回った。し
 かしながら、日ごとの価格の推移を見ると、
 月初の同205円から18日には同210円
 へ上昇し、例年と同様に月内は上昇傾向で推
 移した。

供給面を見ると、11月以降、高病原性鳥
 インフルエンザの発生が複数県で確認されて
 いるが、全般的には産卵に適した時期を迎え、
 卵重が増加するなど生産は順調とみられる。

需要面は、鍋物やおでんなどの季節需要の
 増加、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置
 などの影響を受けていた外食需要の回復が期
 待される。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



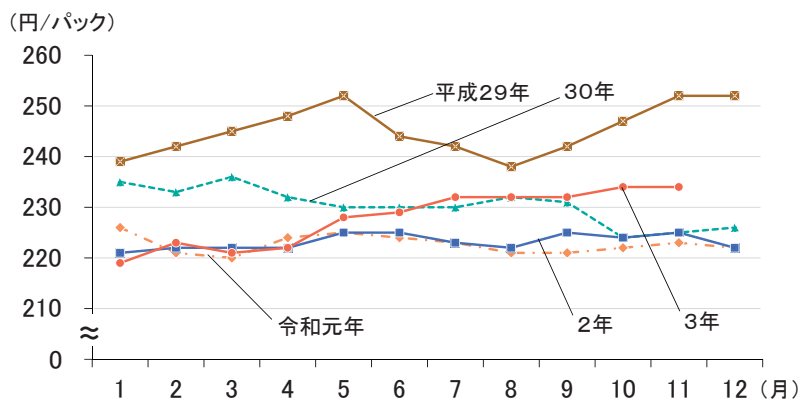
資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
 注：消費税を含まない。

鶏卵小売価格、7カ月連続で前年同月を上回る

本年の鶏卵の価格動向を見ると、卸売価格
 （東京、M玉基準値）が3月以降、前年同月
 を上回って推移する中、小売価格（東京）も
 5月以降、前年同月を上回って推移し、11
 月の小売価格（東京）は1パック当たり
 234円（前年同月比9円高）となった（図
 2）。なお、本年の各月の小売価格は、9月
 以降、直近4カ年で最も高値で推移している。
 また、それぞれの価格の前年同月比の推移を
 見ると、卸売価格と比べて小売価格の変動は
 緩やかなものとなっている（図3）。

国産鶏卵の約5割が家計消費用として仕向
 けられているが、小売価格が高い水準で推移
 する中、10月の鶏卵の家計消費量（全国1
 人当たり）は、942グラム（同4.1%減）
 と前年同月をやや下回った（総務省「家計調
 査」）。令和3年の月ごとの家計消費量は、2
 月以降、巣ごもり需要の拡大により消費量が
 伸びた2年の水準を下回って推移している。
 ただし、COVID-19発生前の過去5カ
 年（平成27年～令和元年）における10月
 の平均消費量（同902グラム）と比べると
 40グラム多く、引き続き高い水準となっ
 ている。

図2 鶏卵小売価格（東京）の推移



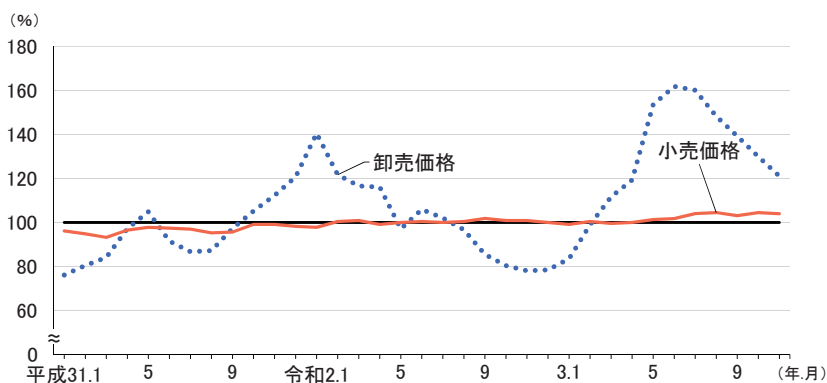
資料：総務省「小売物価統計調査」

注1：消費税を含む。

注2：平成29年はLサイズの価格。

30年以降はサイズ混合（卵重「MS52g～L76g未満」、
「MS52g～L70g未満」または「M58g～L70g未満」）。

図3 鶏卵の卸売価格（東京、M玉）および小売価格（東京）の前年同月比の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」、総務省「小売物価統計調査」

注1：卸売価格は1kg当たりの価格で、消費税を含まない。

注2：小売価格は1パック当たりの価格で、消費税を含む。

注3：小売価格はサイズ混合（卵重「MS52g～L76g未満」、
「MS52g～L70g未満」または「M58g～L70g未満」）。

（畜産振興部 前田 絵梨）